

神國  
加庵  
宋



天皇の兵術士ひょうじが曰いく  
ひも三十枚と星虎室ヒトハシムラを取く  
りひきぬめぬめと支那シナのちちの  
の曰正鵠マサハクと失ミタマて射ヒラフよ鶴ハクと云いふ  
比印可ヒインコ、神祕ミツと開ハラフて見ミルる  
眞マサニやよ蓋カバすハ耶ヤ祕ミツす  
睫マツハひこヒコとハ近アリて見ミルる

是正神也

千金もあきを送賜のうへあらまゆ助上  
よりてあふきとくへ  
おとせと御身よりとゆつと御身と  
よしとまつまひかへぬ入る  
多神の大事と修ん

十寸薦

寂仲



われり金神也。あの神乃親され。日くあく小  
移る。未攀<sup>シレバ</sup>千代の御神樂と。此巫教ぞ神國  
の風化<sup>シテ</sup>うして延令<sup>ヨリ</sup>皇室の御子<sup>ミコト</sup>から。元中天乃  
耶<sup>ハ</sup>て思<sup>ハ</sup>けぬ不仕合<sup>ハ</sup>と。とて物<sup>ハ</sup>のあきよ源<sup>ハ</sup>アハ  
冬の神乃崇<sup>ハ</sup>たけとてありまごとば竈<sup>ハ</sup>木火  
土合水の始<sup>ハ</sup>て。人間乃令<sup>ハ</sup>とつを<sup>ハ</sup>基<sup>ハ</sup>され<sup>ハ</sup>それから  
此五乃れ神。天の神れ七代の清<sup>ハ</sup>地<sup>ハ</sup>う<sup>ハ</sup>稼<sup>ハ</sup>一<sup>ハ</sup>也<sup>ハ</sup>安<sup>ハ</sup>  
のまとあらう。穢<sup>ハ</sup>不<sup>ハ</sup>老<sup>ハ</sup>改<sup>ハ</sup>と渴<sup>ハ</sup>めあらずゆ<sup>ハ</sup>なり  
荒神の名<sup>ハ</sup>爰野<sup>ハ</sup>義明<sup>ハ</sup>。三亥の名<sup>ハ</sup>鷦<sup>ハ</sup>鷯<sup>ハ</sup>壽<sup>ハ</sup>スニ火  
湯<sup>ハ</sup>清<sup>ハ</sup>も<sup>ハ</sup>よ<sup>ハ</sup>火<sup>ハ</sup>とあとあくろ金錢<sup>ハ</sup>がま

釋迦の薪を燃へ一竈の草埃と拂ひあつ五の油清く  
わくゆううあの木乃親ちりき途のまへ奥津彦奥  
は姫ちり日足又陰陽二極みてこそあれ主婦とすうの  
神ぞちうれに鉢目（鉢目）の令れ麻姑（麻姑）千卑の袖振て  
み千絆の音乃とじりそ道よ中もほ後ちうべを振  
掛出の虚戯れ坊（坊）が角松珠と拂湯杖をかめう。移きの  
袴（袴）裏（裏）う坊（坊）が秘文唱下絶び。拂香檜（拂香檜）さべくゆ  
ハ本穴土全のみ妻（妻）お抱のふ業（業）に経きて陰氣と  
筋肉小封（小封）さればとくあるずれ方一物性中大とおく  
裾（裾）そしは一本ハ先國風よそひそて偶と傍（傍）人風

不祥のゆきあれハ科（科）の風乃ハま雲と拂よごとく  
でありく加り魔と追遇々と。神圓が魔殺と經  
と今もはアヘトモトとおふ巫（巫）が八合拂（拂）うち伏の女房（女房）す御降（御降）佛と  
をせ井（井）を喝（喝）川の古都（古都）り社（社）もうち御（御）くも御（御）くも。何と  
やうはううう。やうと業の折（折）ハ仕え那（那）の物微（微）害う  
を日平魔（魔）さうゆいへりうも黒（黒）よあくと青像（青像）かう神仏合  
一の御（御）と御（御）立修觀（修觀）の母（母）とへぬる修経道も假の行者（行者）の立業（立業）ハ神  
の助（助）めゆうゆうり。常世神（常世神）よほざり今内（今内）のは櫻（櫻）やハ風呂見（見）日  
撃大は數（數）大は櫻（櫻）ハ先生のま風ちり日の早れ神（神）むれわくゆ  
神よ始りて神多て人乃怪（怪）前（前）もあす。ふと神の

賜身も神の体をりとひようござります。多く  
アミタニヤモ耶も辛酸湯不測の神より出でられ  
たりと。生物儀りまとう終りてか不測の神へ  
天神七代の場。地神五代より人神の形化を  
神とすとあらゆる形化を人神の形化を  
乃含毅ぐみ達して我國をうる神ふといふ家元  
唯一の場をしづかべり神。神の人と立は道筋  
ワカサガリモチミツの神とすやまととせり  
ウ。神社の裏儀りまつぶつどううらじことえの  
羽車。アミタニヤモ耶の神アミタニヤモの三と五代

乃神を人みて立は形をばく。理氣の氣化  
のみにて。清神をえど。是多くい乱世已來  
れ錯とみどり。往古アミ神事どり。僕士が筆  
一と。孝祖の神より究。佛者うか筆一と。辛地。辛迹  
をくら。子神をわくらびて直アミ。怪跡み一と  
謙徳アミ。又お委抄を述作し。筆とくちせといふ  
それより。辛地。辛迹とれて。あれをゆきれ。日幸の  
明治へ入康乃丸アミ。燼失。希に強アミ。又代  
アミ丸アミ失。失。中古よりの書。私のか。手ども  
され。懲とす。ふ足らざ。七分へ天主。神道三分へ

支那神道す。日本の神職人。かくに三分乃至  
耶神乃によかれ。七八分の天主神乃も荷擔も  
放す。日本神道とつまものもどりくにあらず  
なり。此時已を神より觀て一見所を立宗  
須磨妙の神乃と探ゆ。ちどんば日本流の唯一  
よりんす。神伊岸諸伴拂乃はれ久  
アラム陽の金乃始を混合て鶴鵠も習ひ。アラ  
モホ神生れしゆうそ。岩戸の日出度も神も皆  
の千早振り面白の祝ゆ。神乃舞み千津白木  
綿青和帛の禮弄被達絆の一滴千河萬流」と

人畜をかく産みゆきをもとほへえ極を參立  
て八重垣乃妻參住吉の神乃移。う扇雄とあ  
われ夜の轍。神遊ちるやきのゆづきと下熙  
姫の下崩よ天相乃ふりとすれど。大己斐と千  
ちね乃よりゆき。二ノ百八十の生育をもと。  
聖公川の丹塗れ矣。之海乃傍玉坐。家祖乃移  
社。ノ風雨乃神。ノ天支婦。といふめど。年根  
内神多ス湯鮮。湯鮮とて男根女根を也。年  
越す。交合の事用假保冷。向の山ノ女。女物貢  
の化粧し。而後う糸竹よ魚を御すとゆア。甲斐

多の安本男本より來り交合の形をわへ。毎  
廣あれ鶴嶺。根因のけづれ朴。大母子の重れ草の  
神。薄す。あのをたる本。健きその人ろ矣。本ハ  
後も下れ心す。モテリ。風俗。清興。而ノ。狹用。乃  
社カ。金勢のまわり。圓との道祖。よ。タヘ石の男根  
と立。あ。東の方ノ。揭。本本地。並。とりあり。別。往  
古。道祖の神祇。ナリ。名ヘ。件の。多く。朴代。ナ  
湯使。を。後氣。と。シ。ひ。ま。五。お長。骨。の。袖。後  
と。授。く。て。國民。と。ね。へ。元。三。より。大晦日。ま。と。内。ま。  
日。か。度。と。淨衣。着。一。禮服。を。着。り。て。喜。祝。幸。

異を神。本神。夙の形。ナ。れ。神道。と。つ。そ。先。書。乃  
中。に。連。く。う。の。を。休。ア。ク。モ。又。那。神道。天。笠  
神。乃。ア。外。道。と。ハ。あ。な。と。り。ア。新。之。ア。ハ。ア。リ。ド  
外。道。と。つ。ア。角。の。く。う。あ。ナ。ラ。三。日。す。ア。鬼  
形。の。や。う。れ。ミ。ヘ。入。ま。耶。物。藏。ハ。四。書。又。經。ア。和。キ  
ア。ル。ト。ア。ミ。多。居。カ。ど。づ。ア。唐。物。傳。モ。ア。ヒ。ミ。佛。傳  
ハ。ス。教。ア。一。代。ア。引。密。の。教。ア。か。ド。如。ク。ト。ア。ル。モ。乞  
ハ。也。く。う。ね。方。れ。ほ。を。地。道。と。そ。ア。リ。レ。其。外。を  
知。道。ト。ア。一。代。ア。名。因。と。つ。ア。ム。モ。ア。ト。日。幸。乃  
公。道。モ。ア。ル。日。幸。の。道。れ。ホ。と。ア。ル。ト。ア。リ。日本

公道ナリ。この國ノ公道と被ふんとするにいはせ  
あくの事ナシ。而も夜叉れども夷のあがへら  
もえ、テ西道をうかがふ角ナリ。様よ歩ひ足  
ハカリあそて。兩眼のあに儻目もすくられ。形容  
して思女のやよか道ナラム。たるの魔數も  
百千萬億の眷属あり。政をもく物ア教と  
され。是にうちて今まで人を無一て。あわへま  
邪をも年一と。第ニヨリし教主の佛玄。孔孟  
の聖經。全くヨリヤ拂リ。而も腐傷死傷の國ア化  
と換考す。化されよまきりゆうの念れ世。我モ

放ア。上ト誰君也和焉。又子第ア。豔道通經  
小うきうきく。神キモテル。まくら。くすり。うるさ  
上下のろき。めでテ放ア。ざくらつづく。ト  
修ア。時極。眞財ア。四事。ト。大國。秀吉。ト。う  
やく。ア。え。ま。四事。の。巡狩。ハ。江戸。の。基。ア。う。乙  
ト。の。情。を。上。ヘ。ま。ん。あ。り。ぞ。徐。教。傳。ふ。を。至。代。よ  
用。い。わ。も。よ。落。す。ち。代。序。先。の。多。毛。自。然。の。形。化  
や。り。放。ア。て。き。く。神。刹。て。犯。ア。そ。神。ち。そ。そ。れ  
和。モ。少。細。ア。れ。和。支。前。諸。の。神。教。と。佈。書。れ。ぬ。モ  
ナ。代。ト。も。う。い。被。教。ト。卑。く。一。少。も。く

毀てつゝく神を高くをばくすらのく神社。次  
才にさぐく。アセシム。某師堂観音をもて教説  
をもて唯一と語へおほほ。何をひづく。うすや  
わす。又那神道とりふ喝くもそしてひ吟す  
う。教主某師の走を雇。一向道ませう。神の  
う。走をう。ぶら呼。神の道行もとくゆめ  
飢ゑとも寒死ともぬはまのゆ。又某師観音  
乃たとけとうじうへ唯一宗源のま事へり  
もえねがむれたり。近世神道乃湯通志がゆき  
ゑく。伊勢吉田の古那めけとて理當かんを

立。一己れ所擇外別属。よ。成程直の事す。あり  
や。おつつか楚王のうや。我門手のと捨て天に  
トれ神社の破壊。とみげど。局儒の糟粕と耳して  
立まう。お邪れ紛とく。サ智黠才の生熟など  
よ力もとの。温ぬ典書の风化。わく。思後幼  
児の達するべし。神社豊島の神子とへらまう  
八情。芥子の。ア局儒。もと。正史。文選。ア無  
あざう。失。失事。よ。ほどう。ごく。一概。ちく。入安  
一理を述べ。片見と被ふ。傳教大師。呼。豊長を  
わく。ひ。は大師と互。ア津氣をあそば。勝

尾寺の開成は芹号とれりをもひ。大安寺れり教  
よ託ーをもひて雄山より社主の多良の多良の傳  
變をせりて道條をもととす。彼直此直國風  
の需や多吉をもあがめり。うらかくに門經  
冷然とそゆる。神龜には禪德達の心がもと  
弃散もすけをもひ。其折より生氣死氣とぞ現しく。  
新向うつる。御内院の之間よりとよあらそす。物  
きうし。人首のいぬと八幡様とおじり。御徳を表  
とて日本まれ。武威を耀す。人首が日わてす。異國  
仕ふ。り事。とが日をへ歎一匁り。神龜とて賊松

を吹破和菴。と戒旨と射斂さんと思ひて一社  
と王城の南からて移居す。をもひ。和圓武神の  
淺一清和將軍の守本多。と学び。と。あらゆ  
家廟のオニ。と文徳武備兼全四海。權護の神  
靈。と大日。わふ。究て。卒にゆき。あらば此國城  
天皇へぞれても。ま耶。ちとちと。はまく。まく。徳  
え。備と。だよ。と。す。め。は。う。れ。い。わ。ふ。社。覆。ア。う。失  
神。よ。あ。れ。に。春。裏。の。分。別。を。差。不。二。の。二。か。う  
す。よ。ゆ。う。と。れ。せ。よ。社。祀。と。う。る。し。其。代。れ。玉。信  
の。し。の。が。に。ち。く。す。ま。し。大。日。と。三。津。院。と。お。り。謂。

もなに本途の源流と云ふを。神や佛や會  
報くに與る。礼せれ御のとて、其様變へておみ。黒  
オミとトモマア、するを極て、其の像より母と音で。大  
あくは日より、して、もよもよ之にて、今後此物の如たり  
儀へ事。以ひ、神へ神と云ふ方立。是の風化而進よ。而て、こそ  
御天子ノ御模様徳慶の御。とぞと、礼せ無事の御  
御と。御手て御の天と御うへば、と御へ。御の御初  
の御は、おのたま幸也。御の御、御典に、御そ腰也。車ハ、坐  
墳を、坐て肥と、坐れ。とぞ、御大義。御口。御吉の御市に、里に、有信  
人。とぞ、御圓まの直。とまづ、御御も、とくと、重延真経み。と  
道徳の御法也。御者と、御坐也。御の御思も、御御者後も、御  
の御も、御も。御も。

そもく魔郎は界の大日。天船と吹破す。色郎也。  
空の御法が役神を被ゆ。事う。故く情ゆ。されど

アケリ神ハ天地と俱一方と云。人を窮屈と思  
考せうと。立ち。家風嚴妙の神道う。生毛  
車大。臺車迅速。日の車。神の道よ。あは。よく  
く。また。土着神の牛王。ま。役神。が。それ  
ど。左。右。復身。のれ。怖。家廟。も。なの。役。の。宗  
教。名号。に。奇特。と。神。も。度。を。丈。れ。形。へ。ま。す  
て。名号。に。奇特。と。神。も。度。を。丈。れ。形。へ。ま。す  
て。側頬院。行方。駿。一。何。と。見て。日本。乃。神  
國。ウ。海。す。ウ。神。宣。神。主。の。身。ゆ。て。ハ。寐。食。り。つ。れ  
て。駿。一。ウ。ク。ま。方。經。主。を。ふ。ん。と。神。よ。ほ。じ。ま。し  
觀音經。地藏經。それ。い。地藏經。觀音經。の。天。空。に。觀。り。る

如來と阿彌陀と伽羅陀。ふ補陀。度母。方角。諦の教  
ク三縁の大要。むすり接若。乃おまとて。七罪。三毒  
を般。すて。移るの方後。無化の佐。お絶たり。玉坐  
の如人。どく。聖。まれ。ほじく。れ因縁。ゆづら。とやされ  
一。聖。乍。御。ま。海。う。我。を。され。わ。れ。の。神。の。つろ  
く。い。多。ト。き。う。そ。す。う。り。う。し。と。れ。い。詠。考。妙。詠。の  
井。ど。り。名。も。し。ほ。の。正。ハ。坂。ア。曲。ま。よ。あ。わ。り。我。ふ  
そ。我。圓。神。を。詳。と。れ。ば。詠。考。か。り。せ。義。う。る。ト。を  
き。に。本。う。如。義。う。る。で。詠。考。う。る。で。と。玉。坐。ア。保  
ら。きて。お。と。法。セ。い。ね。り。く。塵。氣。た。う。戲。氣。う。り。玉。坐

人。よ。成。り。傍。け。師。ひ。已。が。は。の。卒。う。れ。ひ。立。て。日。卒。の  
神。も。地。義。詠。音。と。祥。ど。ろ。ひ。む。ち。り。因。卒。の。圓。化。ア  
も。す。土。農。工。高。ア。今。首。を。主。あ。而。姓。ハ。地。義。詠。音。と  
り。し。我。圓。神。の。ア。と。五。と。て。圓。神。と。大。切。手。す。る。こ。そ。  
本。立。翁。目。り。う。り。な。す。也。又。佛。ア。と。ヘ。ヒ。ツ。ヒ。出。せ。ハ。  
う。の。翁。と。ひ。ま。世。を。極。ぐ。妻。ハ。遍。回。の。基。子。ハ。三。眾。  
乃。如。と。う。て。婆。婆。と。と。され。よ。く。こ。そ。あ。う。る。不。可。安。乃  
詠。教。度。布。の。や。詠。教。た。と。う。ハ。佛。の。三。眾。ひ。き。よ。ると。寺。  
ひ。き。う。され。ハ。板。ハ。祝。世。と。ま。う。す。う。く。ハ。神。の。う。り。と。  
氣。乃。所。く。ハ。さ。善。な。り。釋。因。教。の。教。づ。の。神。方。紙。

聖天歡喜天へ抱せられも迎き代りの事。黠才  
乃世脅年僧より先と云はれて其を毎ノトと僧考  
はうそをもんとて。無をテ祭と云ふ行也。允俗も  
志をくよをえり。唯一の社神に因るに被換也。社を  
立あらハ神神ハミミタリ。神明。即神乃別  
たく。神の妻也とす。又そノ神羅ハ唐で  
番焉もん人きりきヒ社人の氣のそこ社と修復  
きものかなく。社地を棄放ハ世脅僧丈狗と休が  
笑求て日本ノ神と南蛮神より仕事天皇乃佛引  
成し。三と五の神すも容と仰り。いも。をとて。緊

耶羅摩十眼羅ナヘ經す。而を辛めの。而を般  
のと強記由来と詮す。大蛇。小怪とも。靈  
も。吉切雀乃じ。一叶千鳥耳ら。。有之。こひ。ナリ。而  
トけり。佛は。モ。極。一と竹馬。ア。ヒ。ト。思。難。ナリ。  
日の本れ神徳と奪わ。ハ。眼。あ。う。れ。ハ。足。と。立。直。に  
お別ハ半。や。通達。ハ。そ。キ。本。ひ。わ。く。は。奇。全。佛  
で。お。も。ハ。流。一。も。く。の。ま。え。よ。延。と。く。そ。う  
と。ま。を。そ。れ。の。か。れ。と。ま。で。そ。靡。く。へ。ま。や。殿。不。ま  
向。ク。意。根。度。ア。重。不。く。あ。う。ハ。形。容。と。あ。く。が。て。そ  
意。信。を。導。そ。多。也。の。直。ハ。身。リ。シ。ハ。一。神。の。ぞ。く。

うちへづらはのいのまもうぬ、童へま湯浸夜乃  
筆道ともち。まよひ檜もを銀方ともゆる  
ものかとせ。せ。けり校換たりまよひつしきとく  
か。も。け。あ。も。し。す。魚。づ。あ。も。く。漢。よ。う。漢。よ。う  
も。も。も。も。も。も。實。作。の。ま。れ。よ。分。化。と。八。百。至。作  
と。よ。く。は。思。人。幼。婦。ハ。行。を。わ。く。と。智。者。ハ。善。人。よ  
一。人。善。人。ハ。千。人。よ。千。人。よ。の。卑。と。訓。ゆ。と。そ。教  
き。れ。柯。と。柯。と。切。手。の。初。じ。う。櫻。と。換。て。櫻。を。角  
あ。も。す。考。ぐ。

た。生。有。者。ひ。前。も。と。の。世。も。か。と。居。か。う。今。と。行。と  
き。を。歌。ふ。ま。と。の。い。あ。か。く。身。と。つ。い。骨。と  
お。筋。肉。と。身。と。の。い。あ。か。く。身。と。お。あ。く。身。と。  
お。そ。ぐ。る。糞。よ。ひ。う。と。糞。中。う。貯。る。と。い。に。お。糞  
有。心。が。く。く。く。く。く。れ。と。是。よ。より。と。土。農。工。高  
と。も。に。身。を。け。く。と。身。を。つ。い。行。向。も。櫻。ひ。又。お  
ね。も。う。と。櫻。つ。く。あ。日。熱。よ。油。を。つ。く。と。す。往。今。朝。り  
あ。も。お。や。と。片。と。天。地。み。風。氣。霧。震。の。意。と。今  
高。患。中。天。の。苦。苦。と。日。底。寧。く。日。と。う。く。と  
ゆ。が。に。な。す。それ。と。も。食。す。若。す。ハ。と。と。あ。り。と。

角のあらわか。儀式にて遣て法被されへば、さうでも  
く是のめぐらむるの是れぬれど氣附合の。か  
まゆく。儀とのつを和。もとよりせね。一か立じあぐ。  
人をあがへはす。我わざきて人のお供てつゝひる。其  
貸者も歎うされへ唯いかざす。利合まうそを  
乞きてあねくへば、あくまのまづきのまづきを  
乞はる。神本の四つぶ金紙と費へは  
不そりがつじよみれ。私と神とくわくじよみれ  
くわくわとあれい。かとあるがくつてくわく  
四年の神剣のとづくゆぢり

士へ士の送乃氏をりとれどすれに一ふ立忠謹  
かきりとれ義のをよ一令下と拵てねうれ令下が  
てけうもまれると思ふるへ士へ一きうち先般へ  
神至。其氏を絶へ金紙の小徑によひて氏神へ  
大道とよび是正直の氣をも

農人へ農の氏神をりとれど。エ人ハエの氏神。商ハ  
商の氏神をりとれど。其一とまう立て大道とす  
是よりて生土神への安全とちり氏神へあつ  
乃相候をすとまうてそむきそむき我國へ勤  
田の直なる神道なり。學文も齊魯もじめ國邊へ

いふもすくとどくゆる神刹なら日本の筋目乃  
みふよきとかうて御室を守り。徳をあるハ神代き  
らはせきへ縁よりのたり。かく全盛。ノ僧上ひ。蒙超  
さんめのゆももあくとく虚のあすそ。内に更  
かくからう恥とれをもととるをうけ。名利よしけ  
支那招はうり。支那の老りよとをこくらをあざけ  
里そ日本の國語よ支那とゆきとひづなづく。  
攝くふゑ者文盲うる田舎のよあれおよへ正直  
冥公から日本鬼の者多く今時乃都もれ學者  
者者利根性鐵なるまの直なるハ希也足はふ神

乃風化をじる。基督教是まにあやうくまひせの。  
法則しさなり。かくもうすいをうち。とうとうすいをうち  
さいものべれし。有物にき。ひけむすいつけぬ。づやよとく  
りや。分にあきらめうらうまん。ば今くるよはうけと。おゆ  
してくわうらうが云直から。先祖の神アツマハ言乃  
通をまして。がく全盛。ノ余情をやめ。ハ人ふ  
不思うする。ハ有へぬ。不足ひふき。うて本是くね  
下。あくべ欲ふもうすとき。能もすまかく。ノア  
うるべよかくせとひらむすわん。ハ現をよ神の寺  
里そやううけくうき。後生ハうあくじちうる。

ヘ。日の本れ直道ハ五百年亦モ消うセ。それより  
道アはのとリテトハヌマ耶天主のモテテウル。シ  
ミケ無仁の德のモテモトニ社傳因化ハ跡スモ  
ナム。その。ら活セヨモト儒教モわざ。社傳モほゞ。  
佛教とのアモヒて宮代モアモキト。據トモク。ム  
一つも日本ノ神訓。スイアモ。ヌマ耶モ。天主儀ア作  
ヒ。ヌマ。ア神が汝牙。又御深ト。大。の虚吹。モカアト  
更吹。モセ。セア人ハ皆。それ形。又。御深ト。ア。ム。ム  
日ノキ。ア。神訓。の直。ト。ハ。不。儀。直道。の。ア。ム。無。れ。モ  
作。ハ。ト。合。互。一。指。合。の。モ。無。の。ト。却。テ。直。ト。リ。考。ト  
作。

陰興。ア。足。ヒ。ヨリ。テ。日本。の。神訓。を。知。ル。考。モ。蓋。モ  
テ。神秘。カ。リ。モ。ソ。日本。人。ム。知。セ。ビ。其。神秘。リ。幽。ガ。の  
國。秘。ヨ。ア。モ。ソ。ヌ。耶。ヌ。ア。天。皇。神。道。ニ。シ。ジ。ム。ラ。ミ。ト  
奥。シ。物。モ。蓋。ト。リ。神。一。次。耶。モ。秘。モ。ト。ナ。ト

支那。學。者。グ。日本。の。方。更。ア。ヌ。耶。モ。ム。リ。今。モ。ト。ハ  
バ。ヌ。耶。の。古。事。モ。ム。シ。ル。ア。ヒ。ツ。ヒ。レ。ヌ。耶。ヌ  
念。さ。リ。日本。の。古。事。ム。ル。ア。ヒ。ツ。ヒ。レ。ヌ。耶。ヌ  
信。ハ。風。俗。ト。モ。ム。ク。の。國。俗。の。ム。リ。ウ。ズ。ヌ。ヌ。耶  
ヌ。ヌ。教。化。ア。夷。ヨ。彦。用。俗。ア。リ。ム。ア。シ。ル。ア。リ。モ  
カ。ゲ。リ。シ。ル。ヤ。日。の。キ。れ。ツ。ロ。ハ。ヌ。ヌ。ト。ア。シ。ケ。ヌ。國。俗。

乃ほり風化を俟つてさういふ於くま  
那風ふわうあきらめとつまう。日本の龜あくん  
人へうくはへきたり  
眼の利洞へとまのたまはる。慄物もがく全體。か  
ら傍よそで。赤乃はあはる。ハナムガ。合のと乃  
魂逃れ。すうれ。体から。作はと見ゆそと人を  
あ。しきせば。もうややう。まゆ。玉。タマ。流り  
をやうて。せう。冥にやすらひ。一旦の佑佑よ  
ううじよ。一人も直を行ひ。わく。月月のえく  
えふ縁あくに當へ。

今迄帝神鏡の。三茅の神と高く仰つて今  
又津儀と。あれ。まろ。から。ゆり。ハ神。上薄。にて已  
ア。厚。から。柄。ち。まふ。津。慈。眼。う。ぞ。ハ。三。神。  
器。ハ。ト。一。き。ま。ヤ。と。思。畏。され。よ。西所。ち。神  
宮。み。公。の。市。社。立。て。ま。中。に。神。の。絃。居。と。て。神。儀  
立。市。祭。儀。ア。遷。宮。よ。津。夜。の。もう。夜。乃。体。の。具。序  
枕。楊。首。津。木。と。け。笠。あ。ゆ。り。御。度。を。紀。且。又。鐵。人  
形。わ。う。そ。主。仕。一。竹。ハ。令。格。ハ。事。相。の。神。道。を。り  
あ。れ。ま。九。人。ハ。畏。ミ。畏。ミ。す。く。ひ。く。歌。よ。御。像。と  
形容。ト。ま。う。う。ハ。一。大。乃。家。廟。事。理。会。一。の。勢。を

が少くは故に上の段たる。春日ハ倭よりけりうそ撮  
社事社ハ神のみ。明神う。天神う。地祇う。荒鬼う。  
寄鬼うと考へての神地神寄鬼うへ儀を立  
て因を修うて的よめで渴仰うすべきハ祖も否  
といへり。まわみ小社探す。ほやくくに勢に  
ハ神風送て日幸れ。幸ふから神形疊像を卑く  
立て高く。清くして潔一。潔祀を享ひ。致してま  
くとも唐人乃左供は泥て己が曾まへそられ  
人よ急ひれどとかた乃理れそうに彦入へ下接と  
招く神氣にえしむかうとくと神社の不整局

を歎くハ勞て功をいたすにてつまく。支那モ堂の入  
吉備のそくわうりそ至まきるやわらかながいとそやうもく  
きまくはあくべり。く内と外とそうスガハ整て至をまど  
ゆめり。神人え司す。過をひるひとひるひと  
今時日本の神訓のつみによろうて和入通ひ。うば。  
祓れ祓く祓除。祓と即く氣修者のこと。が  
りハ又れ。拂。祓。偏僻ぢりれれや。和。う。  
和。う。てれをう。祓れを神のまへ。祓れ。う  
之禮ハ解説。さうか。ば。そぞと。大禮ハ和。う。か  
う。ま。礼。う。是。祓。神の。祓。れ。う。和。う。本  
ノ一を。守。れ。ひ。おのう。祓。れ。う。か。う。和。う。と。そ

ても今はのれに非れたりと云ふて、いふ事うへ  
上代のれにまれり。わたりこれもひへんに、  
ちう。和くらむれらるへ人の事う。れそう  
とてかうたゞ人の事う。れもれりたれに高生  
う。今の代へ下から礼ぞうぞと、えゆうぞ。れ  
い形ぞうを音字のカソとそのへはうよま耶  
卷う。さうく日乃幸れ和くらむなれ人の中に  
やへて立て道。上乃和れうなり人、  
まうきど

世乃直なゆれ人の直めきうにとハ行つて。こと

直ははももちんうちに正直者と云うが、人、  
物もか、先の考とへ正直と云ふものさが不直をへ  
智恵才覚こそ蓋をして云直者と謙諱して、見を  
立せ。城済う者ぐらすり足ま那流の珠引と、  
もじれる。新の植山や晋の文山や魏の曹操など  
身操うち上をに貲名、雲山をうて立ま那流  
を懇よやうとくらむかうじはせよう流行者と  
義圓の通係の裡へもうり孔明韓信が多あくと  
世代もう人を教やうとうれうもくう代よがのう  
うけうもねいすうく無邪邪僕は房てほせこの

人氏の直をじよよきけりきるれオニキ

ソウヘリミハ己ウムアリテ早く道入られハ先因

ミハシテ。日の幸れ道をあめテ神のまにまれ  
アリテモリとれど、更にナリトモアリテ直とキモリ今

の事ハ世ノカクうせよ福主と云ふ。先程よまく

足。度々ナリテナリはうそ。是幸れ御子成ラシキよ

文盲されハ人よめみうれ矣リソグレキス

幸く入りあらぬア道のろよハアヒ様アソシム

貌にナ律儀豪方アソ商ア精を人且事勤カ

て令紙を仕端並手筋を求ケ。因徳暖ア様幸寧

けどハ何ニ不足アリ且ト幼少より利簡ヨリトシテ

クナムモ不文字。頑されハ人中へ出テ片言語

ケ後モハ黒石アツリシテうれが海一けり

アリクアソクシ。それゆヒシテ子モハ物もくも書

アソ入テ。わかトモ。す書も仕立トリのやう。其子

アハ早く字文に長一ゆまつて人共道疏勤ヨリ

リリ分ハヨリ上人ヨリアリ。ゆき回ソリ口説キモリ

御リ。されハ貌にナ文盲とアソシカム。モ観

キスル。ナムキ。幸アソクアソク。モ彼ども

智ある。而キナリ。アソクアソク。モ彼ども

虚れされへぐとて下はるゝを上津とげて入れ  
もどりの。其内祀う文官の事とて、尾ス室モ  
用ひと。身をわうゆし處とじる者、幾十人。足  
高の一と志とて、御神をうちりて、日年の系氏  
乃翁國代をうちりて、三代目へ延とうるも  
聖人のまか安行と仰るる者、皆耶。御繁ヨ  
御裸奥サヌキと。まれまの直<sup>モ</sup>が至<sup>モ</sup>ト<sup>シ</sup>テ也。  
老子ハ、妄智の聖人。びんハ、有はのあらず。今思す  
うり<sup>モ</sup>すから、御神の自然御化あり。神源  
ゆそよの三経の神恩とくの神體と前記之

ハ、それとすてゆくに、身の御園神の創れとく續<sup>フ</sup>  
ら<sup>ク</sup>がとう。ゆめうびて、まじめう、おもふ<sup>ト</sup>、いきぬ<sup>タ</sup>  
よわいに、生か<sup>ム</sup>。祀よもじこするがうくれ。まん妻  
きつね<sup>モ</sup>、妻<sup>ハ</sup>妻<sup>ハ</sup>、身をあう<sup>ト</sup>そやうが<sup>シ</sup>。ま  
まうが道<sup>ス</sup>。おそれ<sup>ハ</sup>否<sup>セ</sup>。意<sup>シ</sup>され<sup>ハ</sup>意<sup>シ</sup>。氣<sup>ヒ</sup>合<sup>ハ</sup>、  
さう<sup>シ</sup>わ<sup>レ</sup>、離<sup>ル</sup>。是<sup>ハ</sup>生<sup>レ</sup>のすれ直<sup>カ</sup>。内<sup>ア</sup>  
ニ<sup>シ</sup>うたり、生<sup>レ</sup>。切<sup>シ</sup>みゆき<sup>ト</sup>。又<sup>ト</sup>  
御<sup>ミ</sup>て、ゆくそつやぐるも<sup>ト</sup>。まこと<sup>ハ</sup>、生<sup>レ</sup>の<sup>ト</sup>、作<sup>成</sup>の<sup>ト</sup>、御<sup>ミ</sup>の<sup>ト</sup>、  
まゆの<sup>ト</sup>、金<sup>モ</sup>目<sup>ト</sup>。其<sup>ハ</sup>、<sup>ト</sup>相<sup>モ</sup>と<sup>ト</sup>が<sup>ト</sup>まの  
生<sup>レ</sup>。身<sup>ハ</sup>、<sup>ト</sup>身<sup>ハ</sup>。身<sup>ハ</sup>、<sup>ト</sup>身<sup>ハ</sup>。

人間才の急勢は湯和食の生理にあらずとせし  
因よりくよ妨られてとてども、ま事とつるべから  
乃煩悶きじのつまむ合同全と人をもつて流間  
を拂本乃千萬はたり声謡事の神よ御子  
縁ゆうこそしの人のゑすりかねんまがえり  
無事をかうこそ圓満まゆううなりえ道をす  
うそひたれをすくに文字文章のまよ泥ても耶  
根性すくほうちつま耶も道学法學こそ君主の  
好不うれずて和也乃神自らや御前の形ひ黒公  
とハ若魚のニウキリ色うふのひくふ蕭ひ私學すよ

もせよ智惠分別ても識了の絶縁ハ黒也天通い  
かく神よ依ヤガ母心とて清きもすり。心ねよのく病  
ハぐうぐくの事ナリ。其を移り清きも賜ハ  
ミト移すすむカク。日本始と勸清一と日の神乃  
彦達と形容レヒ氏神主神を立基レキ太古貴事  
代々とあるも家内の忌様と強く避づけられどそ  
様とあてゝアカヒキモバク行はれられへ和を破  
和るそへれども事に親よほすも耽とさればもに  
えうそぞをうすめ。自説も處されハ難シ。あくまでも  
てあくま和を存とされとみどるベキハ傳

